

彼女達が語る時

— Edith Wharton の *Ethan Frome* と *Summer*

佐々木 真理

1.

Edith Whartonが初期の短篇“The Fulness of Life”において、女性の精神を数多くの部屋を持つ一つの家に喩えた次の一節はよく知られている。

... a woman's nature is like a great house full of rooms: there is the hall, through which everyone passes in going in and out; the drawing-room, where the members of the family come and go as they list; but beyond that, far beyond, are other rooms, the handles of whose doors perhaps are never turned; no one knows the way to them, no one knows whither they lead; and in the innermost room, the holy of holies, the soul sits alone and waits for a footstep that never comes. (14)

ここで象徴的に語られる女性の精神の在り方は、ウォートンの代表作である1905年出版の *The House of Mirth* の Lily Bart を想起させる。一人の女性の生き方が Selden という男性の視点から語られるという構造に焦点を当てるならば、この作品は リリー・バートの “the innermost room” へと続く道を探し求める、セルデンの姿を追った小説である。だが、セルデンは彼女の “the innermost room” へたどりつくことは、少なくともリリーの生前は決してなかった。リリーの魂は誰も訪れることのない奥の部屋にひっそりと閉じこもったまま—あるいは閉じ込められたまま、自らの思いを誰かに語り誰かに耳を傾けてもらうことはなかったのである。

Gayatri Chakravorty Spivak によるあまりにも有名な問いかけ——“Can the subaltern speak?” は、さらにスピヴァク自らの言葉によって、“even when the subaltern makes an effort to the death to speak, she is not able to be heard, and speaking and hearing complete the speech act. That's what it had meant, and anguish marked the spot” (292) と、発話の場における語り手と聞き手の問題として改めて提示しなおされ、「聞くこと」の重要性に焦点が当てられている。¹ スピヴァクの指摘は、リリー

とセルデンの間に立ち塞がった問題の核心を的確に説明してくれるだろう。社交界の花となるべく、自らの思いを語ることを禁じられて育てられたリリー・パートはセルデンに伝える言葉を持つことができなければ、セルデンもリリーの言葉を理解することができない。セルデンがリリーの言葉を受け取ったと思うのは、物語のようやく最後になってからであり、しかもそれはもはや語ることのないリリーの遺体を目の前にしたときでしかない。もちろん、このような女性が語る場の不在は、作者ウォートン自身が抱えていた問題の投影であったといえるだろう。これまで指摘されてきたように、19世紀末から20世紀に生きたウォートンは、女性作家としての評価を確立させる過程で、女性が芸術家として承認されることの困難さを体験してきた。² いまだ評価を下す側である批評家たちが男性主体である当時、ウォートンがたとえ彼らが批判した19世紀の女性作家が駆使した感傷小説的な言葉を脱し彼女自身の言語を獲得したとしても、それに耳を傾けてもらう場が限られていた状況は、まさに決して外と通じることのない部屋に一人座している女性の魂に象徴されているのである。³

本稿の目的は、中期の代表作である *Ethan Frome* (1911) と *Summer* (1917) を書き次いでいく中で、『歓楽の家』における女性の語りの不可能性というテーマをウォートンがさらに追求しようとしたことを論証し、従来とは異なる2作品の解釈を提示することにある。これまで、『イーサン・フロム』と『サマー』は、舞台が同じニュー・イングランドであること、閉ざされた空間における孤独と欲望という同じテーマを扱っていること、さらにはウォートン自身が後者を“the Hot Ethan”と称したことから、⁴ しばしば対をなす作品として論じられてきた。⁵ しかしながら、2つの作品を結びつける、無視できない大きなもう一つの要素として、女性たちの沈黙と、その沈黙の裏に抑圧された語りの問題があるのではないだろうか。ウォートンが1905年に『歓楽の家』を世に問うた後、1911年、1917年のこの2作品において、女性が語るという問題をさらにどのように追及していったのかをこれから検証していきたい。

2.

『イーサン・フロム』は、Emily Brontë の *Wuthering Heights* との類似点が指摘されているように、部外者がふとしたことで事件の当事者と関わりを持つようになり、周囲の状況や人々からの話をつなぎあわせることで事件を再構築する、という構造をとっている。⁶ 事件の舞台であるマサチューセッツのスタークフィールドに商用で立ち寄ることになった“I”が、“I had the story, bit by bit, from various people” (351) とあるようにいろいろな人から少しずつ話を集めていって、“this vision of his story” (362) を築き上げていくというのが物語の外枠で、その内容が主人公であるイーサンの話となっている。このような構造の必然的な帰結として、生きるもの全てを押し黙らせるニュー・イングランドの厳しい冬に象徴されるかのように、当のイーサンは極めて寡黙な人物として描かれている。語り手の「私」が、町の人間がイーサンに声をかける場面を目撃することがあっても、“he would listen quietly, his blue eye’s on the speaker’s face, and answer in so low a tone that his words never reached me” (352) とあるように、イーサンの声は「私」には届かない。「私」がイーサンの馬車に送り迎えをしてもらうようになって、イーサンは沈黙のうちに馬を走らせるだけで、問いかけも“monosyllables” (356) で返されてしまう。

イーサンの沈黙とは対照的に、物語の冒頭と末尾で強調されるのが、女性の声の存在である。語り

手の「私」が初めてイーサン之家に足を踏み入れたとき耳にするのは、“a woman’s voice droning querulously”(362)である。そして、物語を締めくくるとMrs. Varnumの“I don’t see’s there’s much difference between the Fromes up at the farm and the Fromes down in the graveyard; ’cept that down there they’re all quiet, and the women have got to hold their tongues.”(444)という言葉によって、途絶えることのない女性の“the droning voice”(362)が、読者の耳にはいつまでも残ることになるのだ。だが、ここではあくまでも女性たちの“voice”が音としてのみ認識されるにとどまり、その声が語る内容の詳細が聞き取られることはない。

イーサン之沈黙は彼自身之苦難に満ちた厳しく悲しい孤独を表象し、女性(たち)之“the droning voice”はイーサンを沈黙させる、すなわちイーサンを抑圧する声として解釈されてきた。例えば、R.W.B. Lewisは、イーサン之姿に当時離婚問題などで苦しんでいた作者ウォートン自身之姿を重ねあわせ、抑圧される個人之精神の問題として『イーサン・フロム』を読み解いている(308-10)。何よりもMattie Silver之変容は恐ろしく、彼女之声がZeena之声と重なり合ってイーサンを圧迫していったという解釈は妥当性があるように思われる。⁷ さて、だが果たして、沈黙に象徴されるイーサン之苦難から、イーサンのみが事件之被害者であると簡単に結論づけてもよいものだろうか。Judith Fryerは、もし“female reader”であれば異なる読み方が可能ではないかと指摘しているものの、その可能性について詳細には言及していない(181)。ここでは、フライヤー之提示した読み方を進めて、ジーナとマティ之視点から『イーサン・フロム』を読み直してみたい。そのとき見えてくるのは、語るができないというイーサン之姿ではなく、耳を傾けるができないというイーサン之姿の方なのではないだろうか。

そもそも、イーサンを苦しめ、澁澁としたマティの方へと彼之心を向かわせることになったジーナ之“obstinate silence”(381)だが、ジーナは決して最初から抑圧的な沈黙を持って人に接するような女性ではなかった。実際、ジーナがイーサン之病氣之母を看護するためにイーサン之家を訪れたとき、“After the mortal silence of his long imprisonment Zeena’s volubility was music in his ears”(385)とあるように、母之看護に疲れ果てたイーサンにとって、ジーナは生き生きと話をしてイーサンを楽しませる快活な女性であったのだ。ところが、結婚後しばらくすると、そのジーナ之口数が徐々に少なくなっていく。その原因を作ったのがイーサンにほかならないことは、次之一節に明らかだろう。

Then she too fell silent. Perhaps it was the inevitable effect of life on the farm, or perhaps, as she sometimes said, it was because Ethan “never listened.” (386)

イーサンが故意にジーナに対する耳を閉ざしていった様子は、さらに、“he had first formed the habit of not answering her, and finally of thinking of other things while she talked”(386)と述べられている。もちろん、イーサンが望んだような都会での生活をジーナが嫌がったこと、ジーナ自身が病氣がちであったことなど、二人之不和を招く原因は他にもあったわけだが、イーサンは決して自分之側にジーナを受け入れる余地がなかったとは思わず、ジーナがしだいに沈黙へと向かっていく中で彼女が訴えようとしていたものを聞き入れようとはしなかったのである。それどころか、亡くなった母親とジーナを比べ、“He recalled his mother’s growing taciturnity, and wondered if Zeena were also turning ‘queer.’ Women did, he knew”(386-87)と、様子が変わっていくジーナについて、女性はそういうものだとして極めて単純にジェンダー之問題に還元するのみで、それ以上思いやることもない。

この意味で、イーサンの母親のエピソードも極めて示唆的である。元気なころは“a talker”(385)であったイーサンの母は、病気の後、話す能力を失ったわけではないにもかかわらず、滅多に口を開くことはなくなってしまう。そして、

Sometimes, in the long winter evenings, when in desperation her son asked her why she didn't "say something," she would lift a finger and answer: "Because I'm listening";... (385) と、“a talker”であった母親は“a listener”へと変貌してしまうのである。このような二人の女性の変貌は、閉ざされた空間がもたらす孤独にのみ原因があるのだろうか。自ら語ることをしなくなった母親の思いも、そして妻であるジーナの思いも‘queer’と決めつけ、耳を傾けようとはしないイーサンの冷たさも二人の女性を狂気へと駆り立てていった要因の一つではないだろうか。

イーサンの冷たさは、イーサンがジーナと結婚したことについて、“He had often thought since that it would not have happened if his mother had died in spring instead of winter”(385) と、人が恋しくなるような寂しい冬に母に先立たれてしまったために結婚を申し込んだのであり、季節が違えば結婚をしなかったかもしれないと思う箇所にまず読み取ることができる。そして、そのような冷たさが最も感じられるのが、作品の中でも特に印象的な、ジーナの秘蔵の真紅の硝子の器が粉々に砕け散る場面だ。マティがイーサンを喜ばせようと“his favorite pickles”(391)を用意した“a dish of gay red glass”(391)を、ふとしたはずみでジーナの猫が割ってしまうわけだが、イーサンはその器について“Where did it come from?”(393)とまったく記憶していないのである。驚いたマティの方がむしろ詳しく、“It was a wedding present—don't you remember? It came all the way from Philadelphia, from Zeena's aunt that married the minister”(393) と、それがイーサンとジーナの結婚祝いの贈り物であったことを明かすのである。そして、もちろん、イーサンは器を割ってしまったことがジーナをどのように傷つけるかということは考えない。割れた器を目にしたときのジーナの衝撃の大きさは、以下のように描写される。

Her voice broke, and two small tears hung on her lashless lids and ran slowly down her cheeks. "It takes the step-ladder to get at the top shelf, and I put Aunt Philura Maple's pickledish up there o' purpose when we was[sic] married, and it's never been down since, 'cept for the spring cleaning, and then I always lifted it with my own hands, ... (415)

誰も手の届かないところに大切にしまっておいた結婚の贈り物は、ジーナがイーサンとの結婚を大切に考えていたということの証ではないか。ジーナはこの器を“the one I cared for most of all”(416)とさえ語っているのである。思えば、イーサン側から見たジーナは徹底的にイーサンを苦しめるようなまさしく年老いた魔女のような存在として解釈されてきたが、⁸ そもそも決して裕福なわけではなく、しかもいまにも雪に埋もれそうな寂しい場所に家を持つイーサンとの結婚に踏み切るには、ジーナの側にもそれなりの覚悟とイーサンへの愛情があったはずである。真紅の硝子の器はジーナのそのような思いの象徴として読めるのではないか。壊れてしまった器を“a dead body”(416)のように抱えるジーナの姿は、まるで自分の砕かれた心を抱えているかのようだ。

イーサンが女性の声を聞こうとしない人間であることは、マティと櫛で心中を図った場面においても象徴的に描かれている。櫛を大木に衝突させた衝撃で気を失っていたイーサンが、意識を取り戻したとき耳にしたのは、“a little animal twittering somewhere near by under the snow”(438)であっ

た。それは愛するマティの呻き声であったにもかかわらず、イーサンにはその声が“a small frightened cheep like a field mouse”(438)にしか聞こえず、マティが何を呟いているのか聞き取ることはできないのである。結局、ここでマティが何を言おうとしていたのかは、作品では語られることはない。マティを看病したヴァーナム夫人は、事故の後のマティについて“*They gave her things to quiet her, and she didn't know much till to'rd morning, and then all of a sudden she woke up just like herself, and looked straight at me out of her big eyes, and said . . .*”(442)と語り手の「私」に話すわけだが、その言葉は読者には謎のまま残されることになる。

マティが語ろうとしたのは後悔なのか哀しみなのか、イーサンへの愛なのか恨みなのか、私達にはわかるすべはないが、「私」が対面した、事故から20年後のマティが“*the bright witch-like stare*”(440)を持つ女性へと変貌してしまったのを目撃するとき、その姿がイーサンの母やジーナの姿と重なり合い、イーサンが掬い取ることのなかったマティの声が、そして母やジーナの声の重さが前景化されていくのである。イーサンの母からジーナへ、そしてマティへと続く哀しみの連鎖は、ジーナとマティの重なり合うイメージによって、思えば作品の冒頭から暗示されていたのである。⁹『イーサン・フロム』が表すのは、“*the droning voice*”へと、“*a small frightened cheep like a field mouse*”へとイーサンによって貶められてしまった女性たちの声であり、声が語ろうとするものを受け取ろうとしない、イーサンの聞く意思の欠如であり、女性の語りの場の成立不可能性なのである。

3.

『イーサン・フロム』から6年後に出版された『サマー』は、未婚女性の性的体験と妊娠を描いていることから、女性の性的欲望という観点から論じられることが多い。¹⁰ だが、『サマー』においても、『イーサン・フロム』と同じく、女性が語る場の成立不可能性という問題が、女性の沈黙と男性の雄弁さを通して前景化されているのである。

ヒロインのCharity Royallの姿を通して浮かび上がってくるのは、まず、女性が自己を表現する手段を得ることや方法を学ぶことの困難さだろう。チャリティはNorth Dormerという小さな村の唯一の図書館に勤めているにも関わらず、蔵書に関する知識は皆無に等しく、書物を読むこともない。だが、チャリティ自身が教養や知識に関心がなかったわけではない。村で一番の権力者であるMr. Royallの家に幼い頃に引き取られたチャリティは、Mrs. Royallの死後、家に一人取り残される孤独なロイヤルの姿を慮り、寄宿学校での高等教育を受ける機会を断ったのである。その結果、適切な教育を受けられなかったチャリティだが、決してそのような状態に満足はしていなかった。その証拠に、Nettletonという大きな都市を訪れたことをきっかけに、外の大きな世界への関心を持ち、“*This initiation had shown her that North Dormer was a small place, and developed in her a thirst for information that her position as custodian of the village library had previously failed to excite*”(5)とあるように、知識への欲望を持つようになる。だが、閉ざされた小さな村という設定も大きな要因ではあるにせよ、教育を受けられなかったチャリティはそのような欲望をどのように昇華させればよいのか見当もつかなかったのである。

適切な教育を受ける機会も手段も与えられなかったチャリティは、自己を表現する術を持つことができない。その姿は、『サマー』に登場するいわゆる高等教育を受けた男性たち、Lucius Harneyや弁

護士のロイヤルとは極めて対照的なものとして描かれている。例えば、チャリティはハーニーと初めて出会ったときから、以下のように彼の話す言葉を理解することができない。

Her bewilderment was complete: the more she wished to appear to understand him the more unintelligible his remarks became. He reminded her of the gentleman who had “explained” the pictures at Nettleton, and the weight of her ignorance settled down on her again like a pall. (10)

“Education and opportunity had divided them by a width that no effort of hers could bridge”(49) と描写されるように、チャリティとハーニーの間には大きな溝が立ち塞がり、話し手と聞き手の双方によって完成する発話行為が成立することはないのである。チャリティがハーニーに懸命に何かを訴えようとするがあっても、彼は“Of this appeal her hearer took up only the last question”(31) とあるように自分が興味を引かれた箇所にはしか反応を示さない。“He was no longer listening to her, he was only looking at her”(106) という一節に顕著なように、ハーニーがチャリティの言葉に耳を傾けその内容を理解しようとするのではなく、ハーニーはしばしば突然チャリティとの会話を打ち切り、ただチャリティを見つめるという行為に走る。欲望の対象としてしかチャリティを見ないハーニーにとって、チャリティの言葉は邪魔でしかなく、チャリティの言葉を聞こうという意味は微塵もないのだ。二人の間に“a private language”(83) が存在するようになったとしても、それはあくまでも性的欲望を介しての言葉でしかなく、語る者と聞く者との相互作用的な発話の場では決してないのである。チャリティが何とかハーニーに言葉を返そうとしても、“the words died in her throat”(136) とあるように、チャリティの言葉は空しく消えていってしまう。

チャリティの“her inability to express herself”(139) は、書くことによっても自己を表現できない彼女の姿を通して、さらに強調されることになる。ハーニーに手紙を書こうとしても、“But the letters were never put on paper, for she did not know how to express what she wanted to tell him”(143) と、チャリティはどのように文章によって自分の思いを伝えればよいのかわからない。決定的なのは、ハーニーから別れを告げる手紙を受け取ったときのチャリティの反応である。

She read the letter with a rush; then she went over and over it, each time more slowly and painstakingly. It was so beautifully expressed that she found it almost as difficult to understand as the gentleman’s explanation of the Bible pictures at Nettleton; but gradually she became aware that the gist of its meaning lay in the last few words. (149)

チャリティはまずハーニーの流暢な文体が言わんとしていることを理解するのに苦勞する。そして、ようやくハーニーの手紙が自分との別れを告げていることに思い当たり、何とか返事を書こうとしても、やはり、“she found nothing to say that really expressed what she was feeling”(152) と手紙を書くことはできないのである。¹¹

チャリティを通して浮かび上がってくる女性が自己を表現することの不可能さは、前述したように、チャリティの育った境遇や失われた教育の機会に起因するものであり、決してチャリティ自身の本質的な能力の欠如として作中では提示されていないことに今一度注目したい。Nan Johnsonが指摘しているように、19世紀のアメリカ合衆国においては“access to rhetorical power”(3) が高度にジェンダー化されており、そのような中で、南北戦争後から20世紀初頭にかけての“how to value women’s words”

(2) をめぐって繰り広げられた論争には、“the tension between expanding roles for women and equally intense desires to keep those roles stable”(2) がせめぎあい、白人の中産階級を中心とした女性たちは“public rhetorical space”(6) へ参加するためにさまざまな策略を弄する必要があったのである。もちろん、『サマー』が執筆された1910年代後半は、Haytockが述べるように、アメリカ社会全体が大きく変化し、特に“rapid and extreme changes in expectations for women’s behavior”(54) は著しいものがあつた。そして、女性参政権運動の高まりの中で、女性たちは公的領域におけるパブリックな言説を習得しレトリックの力を磨いていったのである。¹² だが、“*Summer* is about the absence of such change in small town and rural America”(“Introduction,” xix)とアモンズが言い当てているとおり、そのような変化は『サマー』からは恐らくは意図的に削除され、依然として“rhetorical power”へのアクセスがジェンダー化されている社会的状況によって、チャリティが自己を語る力も機会も奪われていることが前景化されているのだ。チャリティはハーニーの巧みな文章を理解するための教育を受けることもできず、ハーニーに理解してもらうための言葉を習得することもできなかったのである。

チャリティを公的領域から隔離しパブリックな言説へのアクセスを遮断したのは、チャリティの育ての親であるロイヤルであった。ロイヤルはノース・ドーマーで唯一の弁護士であり、社会的な地位も名声も持つ、まさに優れたレトリックの力によってパブリックな言説を自由にあやつることができ存在である。そのような姿は、日頃愛読している書物が“Daniel Webster’s speeches”(19) であることにまさに象徴されているだろう。19世紀前半に活躍した政治家のダニエル・ウェブスターは、“magnificent and effective speeches”(Smith 1) で知られた演説家でもあつた。実際、ロイヤルが作中でその巧みなレトリックの力を発揮する場面がある。ノース・ドーマーが村を挙げて企画した“Old Home Week”という催しで、村を代表して行なつたロイヤルの演説は、チャリティの視線から以下のように描かれている。

She had never heard him speak in public before, but she was familiar with the rolling music of his voice when he read aloud, or held forth to the selectmen about the stove at Carrick Fry’s. Today his inflections were richer and graver than she had ever known them: he spoke slowly, with pauses that seemed to invite his hearers to silent participation in his thought; and Charity perceived a light of response in their faces. (125)

ここで注目すべきは、“That was a *man* talking”(126) という聴衆の言葉に示されるような、まさにジェンダー化されたロイヤルのレトリックの力に、チャリティがいつの間にか引き込まれ耳を傾けていたことだろう。このチャリティの姿は作品のラストの彼女の姿を予言することになるのだ。

物語の終盤でハーニーに捨てられ、ハーニーの子供をお腹に宿したまま、生まれ故郷の“the Mountain”へ逃避を図つたチャリティだが、生みの母親がこの世を去り、あまりにも悲惨な生まれ故郷の状況を目の前に自らの将来に何の見通しを持つこともできず、絶望と疲れで徹底的に打ちのめされてしまう。そんな彼女の前に姿を現し、救いの手を差し伸べたのがロイヤルであつた。ロイヤルはチャリティをお腹の子供と一緒に受け入れ、結婚を申し込む。そして、二人が夫婦となってノース・ドーマーの家に足を踏み入れるところで物語は終わる。だが、これはウルフが“the beginning of love”(283) であると述べるような幸福な結末では決してない。チャリティがロイヤルとの結婚を承諾する/させられる過程は、まさに、ロイヤルのレトリックがチャリティの言語を奪い、チャリティが語るこ

とを抑圧していく過程にほかならないのだ。自分を迎えに来てくれたロイヤルに対し、チャリティは“*She tried to speak, to stammer out some explanation, but no words came to her*”(174)と言葉を発することができない。“*the grave persuasive accent*”(177)を持つロイヤルに求婚されても、ただ“*the dread of her own weakness*”(177)に打ちひしがれ、判断力も思考力も停止してしまったチャリティは“*Her voice failed her and she stopped*”(177)ともはや何も言うことができないのである。そして、あたかもチャリティの弱さにつけこむかのように、ロイヤルは自らのレトリックの力を以下のように利用する。

His tone was so strong and resolute that it was like a supporting arm about her. She felt her resistance melting, her strength slipping away from her as he spoke. (177)

もはや“*only the lift of a broken wing*”(183-84)程度の思考しかできないチャリティは、ロイヤルの“*You're a good girl, Charity*”(190)という言葉に従順に受け入れ、あれほど反発し敵意と軽蔑さえ抱いていたロイヤルの妻となって、ロイヤルのあの“*the red house*”(190)へ帰還するのである。このとき、ロイヤルの色褪せた赤い家はチャリティを閉じ込める牢獄へと変貌する。おそらく、チャリティはこの先一生赤い家から外へ出ることはできず、自分の声を聞き取ってくれる者の足音を空しく待つだけの生涯を送ることになるのである。

4.

アモンズが“*one inescapable way to think about the Mountain and Wharton's story of dark-haired, swarthy Charity's rescue by a fatherly white man named Royall is as a fable about imperialism*”(Summer, “Introduction” xxii)と論じているように、“*the Mountain*”の表象やチャリティとロイヤルの関係はまさに植民地主義的であり、チャリティは語ることでできないサバルタンの一人だといえよう。ウォートンが1905年に発表した『*歓楽の家*』で描いたリリー・バートの語りの場の不在は、1911年の『*イーサン・フロム*』、そして1917年の『*サマー*』において、ニューヨークの上流社会からニュー・イングランドの小さな村へと設定を変えて、再び描かれることになったのである。リリーが自らを語る場のないまま死を迎えたように、マティとジーナの言葉はイーサンとそして語り手によって意味のない音にすぎない声へと貶められ、チャリティの言葉はロイヤルに飲み込まれ赤い家の奥へと消えてしまった。リリーの苦悩は彼女の死を以てしか究極的には表象されえなかったのと同じように、ジーナの苦悩は真紅の砕け散った器にのみ表象され、チャリティの苦悩は彼女がその中に消えていった赤い家の扉にのみ表象される。だが、テキストから浮かび上がる彼女達の苦悩は、彼女達の語りの場における聞き手が不在であること、彼女達の発話行為が成立しえないこと、そして、逆説的ではあるが、だからこそ語ろうとしたものが確かに存在したことを教えてくれるのではないだろうか。ウォートンが彼女達の語る場所を見出すには、新しい言葉を切り開き獲得していった新しい時代の子供たちが登場する、1920年に発表される*The Age of Innocence*を待たなければならなかったのである。

註

- 1 この問題については、『スピヴァク、日本で語る』において竹村和子がスピヴァクとの対話の中で焦点を当てている。80-91参照。
- 2 Showalterの85-103、Gilbert and Gubarの123-168を参照。
- 3 もちろん、スピヴァクの指摘するサバルタンの状況及び問題性は、時代も社会的背景も異なり、ウォートンやウォートンの描く登場人物たちとはまた違った、複雑で多様な困難さを内包していることを踏まえないといけないが、Elizabeth Ammonsが*Summer*に寄せた“Introducton”で指摘しているように、『サマー』における帝国主義的表象を考慮にいれるならば、ウォートンを読解する上でポストコロニアリズムの視点を導入することには意義があると考ええる。
- 4 *The Letters of Edith Wharton*, 385参照。
- 5 例えば、Fryerの177-80、Goodmanの67-84、Lewisの396-98、Raphaelの289-90、Wolffの285-86を参照。
- 6 ウルフの160を参照。また、ウルフも指摘していることだが、ウォートン自身もブロンテを意識していたようで、自伝*A Backward Glance*において、『イーサン・フロム』で描こうとしたニュー・イングランドは“Emily Brontë would have found as savage tragedies in our remoter valleys as on her Yorkshire moors”(1002)と述べている。ウルフはさらにMelvilleやHawthorneと比較しつつ、『イーサン・フロム』が語り手の物語に他ならないことを論じている。同じくフライヤーも語り手は“Ethan Frome’s counterpart”(185)であるとし、この作品における語りの構造の重要性に焦点を当てている。
- 7 Benstockもルイスと同じく、病気の妻に縛られたイーサンとウォートンを重ね合わせた解釈を行っている。ベンストックの247を参照。
- 8 アモンズが*Snow-White*と関連づけて、ジーナを通して表象される魔女の姿を考証している。アモンズ、*Edith Wharton’s Argument*の63を参照。
- 9 イーサンを迎え入れたマティがジーナとそっくりに見えたという場面(391)、ジーナの椅子に座ったマティが一瞬ジーナの顔にすり替わろうとしているかのように見えた場面(395)を参照。
- 10 Haytockの48、Leeの508-09を参照。
- 11 チャリティのこのような表現能力の欠如は、Waid(124)やフライヤー(198-99)が指摘しているが、いずれもその原因や時代背景については詳細には論じていない。
- 12 もちろん、ここにはいわゆる私的領域と公的領域の区分という問題も絡んでおり、例えばAmy Kaplanが、私的領域におけるドメスティックな言説と公的な領域におけるパブリックな言説との共犯性を指摘するように、女性たちがパブリックな言説にアクセスできなかったからといって、それがそのまま女性たちの影響力のなさにつながるわけではない。しかしながら、『サマー』では意図的に二つの領域の断絶が強調され、チャリティの無力さに焦点が当たっていることに注目したい。

Works Cited

- Ammons, Elizabeth. *Edith Wharton's Argument with America*. Athens: The U of Georgia P, 1980.
- . "Introduction." *Summer*. 1917. New York: Penguin Books, 1993.
- Benstock, Shari. *No Gifts From Chance: A Biography of Edith Wharton*. Austin: U of Texas P, 1994.
- Fryer, Judith. *Felicitous Space: The Imaginative Structures of Edith Wharton and Willa Cather*. Chapel Hill and London: The U of North Carolina P, 1986.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *No Man's Land, Vol.2: Sexchanges*. New Haven and London: Yale UP, 1989.
- Goodman, Susan. *Edith Wharton's Women: Friends and Rivals*. Hanover and London: UP of New England, 1990.
- Haytock, Jennifer. *Edith Wharton and the Conversations of Literary Modernism*. New York: Palgrave Macmillan, 2008.
- Johnson, Nan. *Gender and Rhetorical Space in American Life, 1866-1910*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 2002.
- Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire in the Making of U. S. Culture*. Cambridge and London: Harvard UP, 2002.
- Lee, Hermione. *Edith Wharton*. New York: Alfred A. Knopf, 2007.
- Lewis, R. W. B. *Edith Wharton: A Biography*. New York: Harper & Row, 1975.
- Raphael, Lev. *Edith Wharton's Prisoners of Shame: A New Perspective on Her Neglected Fiction*. New York: St. Martin's Press, 1991.
- Showalter, Elaine. *Sister's Choice: Tradition and Change in American Women's Writing*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Smith, Craig. *Daniel Webster and the Oratory of Civil Religion*. Columbia: U of Missouri P, 2004.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Subaltern Talk: Interview with the Editors." *The Spivak Reader: Selected Works of Gayatri Chakravorty Spivak*. Ed. Donna Landry and Gerald MacLean. New York and London: Routledge, 1996.
- Waid, Candace. *Edith Wharton's Letters from the Underworld: Fictions of Women and Writing*. Chapel Hill and London: The U of North Carolina P, 1991.
- Wharton, Edith. *The Age of Innocence*. 1920. *Edith Wharton: Four Novels*. College Edition. New York: The Library of America, 1996.
- . *A Backward Glance*. 1934. *Wharton: Novellas and Other Writings*. New York: The Library of America, 1990.
- . *Ethan Frome*. 1911. *Edith Wharton: Four Novels*. College Edition. New York: The Library of America, 1996.
- . "The Fulness of Life." *Edith Wharton: Collected Stories 1891-1910*. New York: The Library of America, 2001.

- . *The House of Mirth*. 1905. *Edith Wharton: Four Novels*. College Edition. New York: The Library of America, 1996.
- . *The Letters of Edith Wharton*. Ed. R.W.B. Lewis and Nancy Lewis. New York: Charles Scribner's Sons, 1988.
- . *Summer*. 1917. Intro. Elizabeth Ammons. New York: Penguin Books, 1993.
- Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. 1977. Reading, Massachusetts: Addison-Wesley, 1995.
- 『スピヴァク、日本で語る』 鶴飼哲監修 本橋哲也他訳 みすず書房、2009年。